

平成元年7月15日号（毎月2回）第14号（発行）第14号（通巻21号）昭和64年6月25日創刊（種別別紙認可）

# 今日のソ連邦

1989  
14  
7.15

第1回人民代議員大会  
寒極をめざして



ようやく暖をとる、体を伸ばすことができた。あとは夕食と眠りだけ。

人跡未踏の雪原 寒極めさせて トナカイを獲ったオオカはウラジスラフ・ホチコスキーに仕留められた。

いかもカメラが凍らないように、また  
体温で暖まりすぎないように維持しな  
ければならなかった。だから私はセ  
ーブを七〇〇にわたって、上着の  
前を開いて歩き通した。なぜなら、暖  
かいかまをツイナエ結露のものを取  
り出すと、たちまち蒸気を立て、それ  
が凍ってしまふからだ。そんなときは  
休題を持って、テントの中で解かさな  
ければならなかった。

このような非人間的な寒さの中では  
あらゆるものが脆くなってしまうので  
カメラは陶磁器よりも慎重に扱わな  
ければならない。フィルム巻き上げや  
張てんも、急激な動作は禁物だ。それ  
にはコツが必要で、慣れるしかない。  
道中での撮影はかなり困難だった。  
というのも、遠征の目的は、氷窟のコ  
ーブを数週間、最大距離を歩くと  
いふものだったからだ。走りながら撮  
動するなんて考えられなかった。トナ  
カイにまつわる苦勞はすでに述べた。  
そのほか野営地ごとに何かが腐ったり  
腐の先頭を写すために深い雪を踏み分  
けて先へ出たり、詩的な情景を撮ん  
だり……そして、そのレポートを起こし  
ンターを押して、ゆっくり書き上  
げ、自分のソリへ、すっこんで、戻る  
さらに遠ざかって行くその何やら  
に包まれたトナカイたちを、3枚写  
し……急いで判を消いかける。  
水溜りにもしばしばいやな思いをさ  
せられた。この特殊な自然現象は、川  
を溜り水の上に水がたみ出し、その  
表面が凍りつくもので、その存在に  
気がつくのは大抵、トナカイとソリが

内ならよかった。足が濡れるだけです  
んだからだ。それは上履といー  
大間には想像を納めるような条件にも  
難堪するものだ。おれおれの都合もそ  
りだった。この水溜りを渡るのに、ふ  
つうのフェルト長靴がいちばんだとは  
だが予想できなかった。最初に水に  
足をつくと、足は冷たい。濡れる  
からだ！ だが、要領が分かれば簡単  
だった。水に入ったら、すぐに足を相  
互に水から引き上げる。すると濡れた  
フェルト長靴の表面が凍り、もうそれ  
以上水はしみ込まないのだ。  
それはまったく手取せぬ美談だった。  
トナカイは水をこわがるので、全速方  
で水に飛び込んで、半ば以上濡れてし  
まったトナカイは、一刻も早く抜け出  
そうと全力で綱を引っ張る。ソリは互  
いに綱をつながっているから、列全体  
を引っ張る感じになる。まだ水に入っ  
ていないトナカイは、四つ足を踏ん張  
って蒸気の上が水面を眺めている。  
結局は水の中にある何頭かのトナカイ  
は、水に入るまいとする仲間たちの力  
に對抗できない。これが兎もタイナス  
約50度のもので凍じられるのである。  
ほとんどすべてのこのような水溜り  
に、おれおれはすでに日が沈んで、チ  
イオの上に夜のとぼりが下りるころに  
出くわした。薄明のもとでは、これら  
の光景はすべて神秘的な色合いを帯び  
る。隊員の一人がその上に立ち土布  
を、悲しい声でトナカイを取り立  
てながら、動かなくなつたソリに次々  
に走り寄って、綱を切り、1台ずつ木  
から引き出すとき、この光景は頂点に

わが案内人がいと怖々と取りやま  
す。そのごくありふれたナイフに私が  
注目するのは、まさにこの上りなとき  
だ。野営地でのお茶のとき、私はマイ  
ガの住民のこの忠実なお供の精微につ  
いて賞讃した。  
ナイフの刃は細く四角す。長さ15  
cm。どんな石でも割けるように、  
かなり軟らかい鉄でできている。刃は  
片側から、逆刃のうちの片側だけを研  
ぐ。握りの断面は四角形で、材は固く  
て丈夫なシカカバの樹。これらの特徴  
からだけでは、一見何の変哲もないよ  
うだが、本中に講としても注ぎます。  
浮かぶように考えられている。

### CASTLE

あるとき、鏡の水溜りの凍れを受け  
たあと一息ついたところで、私は案内  
人たちにずっと以前から気にかかって  
いたことを質問した。たれかが本写に  
頭のとっぺんからつま先までずぶ濡れ  
になってしまったら、どうすればいい  
のか、と、テントを張って、火を起こ  
すには時間がかかりすぎる。  
これに対して案内人の一人は、現地  
人が危機に陥ったときにやる昔からの  
前案な方法がある、と答えた。大きな  
トナカイを殺して、すぐに腹を裂き、  
肉臓を出して、裸で腹の中にもぐり込  
む。死んだトナカイの体温が、ここま  
た人間の生命を守ってくれるというの  
だ。辛い。おれおれはそれを試す必要  
はなかったが、  
おれおれは凍った無数の川や水溜り

ければならなかった。  
二には標高何千メートルの峰も、深い  
カレバも、動かない。だが、出立  
のそのの列にとっては、距離が長  
どの峰でもかなりの困難だった。トナ  
カイたちは寒くないと思われよう  
な斜面をぐずぐず歩んだ。文字通り力  
を出し尽くしてしまったこの真紅な動  
物たちの負担を減らすかでも削減して  
みよう。おれおれ自身もソリを引い  
カリーアではソリでなくても空気が  
薄いので、山道でおれおれは息も絶え  
絶えだった。心臓はいまにも胸から身  
び出すほど激しく打った。

隊の中でいちばん大きなトナカイが  
死んだのは……だった。美しく  
力があり、立派な首を持っていたこの  
トナカイは、五〇〇もおれおれと  
動を共にし、ついに力尽きて倒れた。  
腕もなくさらに3頭が同じ運命を  
受けた。これらの死は悲しみだけであ  
く、何か何でも寒極むにたどりつくぞ  
という決意を燃え上からせた。  
3月8日のまだ明るいうちに、お  
れおれは遠方に一条の線を認めた。そ  
が待ちに待った寒極、オイミ  
った。2、3時間後におれおれは町  
住民に迎えられた。彼は輝いていた。  
まりたい。眠りたい。という以外に  
の望みもないかのように思われた。  
しろ家の間、毎日長時間居らずしか  
ついでになかったからだ。ところがど  
だらう。疲れも寒さも、まるでなか  
たかのように、全員が、北で建てた  
寒い場所であることを示す標識をバ  
ッに、何はともあれ、写真を撮るこ

はじはし、交通手段となり、冬のマイ

はじはし、生命の唯一の保障で

「医学者たちは、トナカイ肉は比

しい健康食品だと見なしている。

も多くの原住民にとっては主食

トナカイ肉のステーキは絶品

凍った肝臓や脳みそのステーキ

だ。

トナカイの毛皮の最大の特徴は、そ

んな肌を覆っているとマイナス40

度、暑くもなく、寒くもない。と

ちにある。服は人間を寒さから最

まるとに作られている。上衣は

かたく縫ってあり、大きな草が

ついて、体を大きく動かしても

くつくつでなく、下の部分が少

なっている。ズボンにはふつうの形を

取り、やはり毛を外にして縫って

いる。これは人間が敢

てで呼吸をしても凍りつかない唯

の皮である。

には特に工夫がこらされている。

長靴で、トナカイの足の皮で作

りから非常に丈夫で、保温性がい

には毛皮の靴下が、はめ込まれ

る。まずこれを素足で履いて、

上に長靴を履く。靴底には毛が

ちかかか上に向けて寝るように毛

でてあり、すべりそうになつた

トナカイの靴をする。皮服はす

### ペットが「コービー」を

初めのうちはおれおれで一人と

して、トナカイを飼育するのは必

ずな動きで雪の中へ放り出されかねな

か。凍りついた雪の吹きさらしのため

かのようにだ。トナカイたちがな

かどつぜん角でつかかろうとする

で、転落しないようにつかまっ

て、角から身をかわしたりしな

らな。その上でバランスをとらなければ

ならな。

われわれは、約束の地に向かう

うに野営地をめざした。なぜならこれ

は暖かいテント、暖かい食事、熱いお

茶を意味していたからだ。寝袋の中で

体を伸ばし、マイナス48度、風、60

度の行程、凍傷になりかか。た際にも

かわらず、生きていくことを実感でき

るからだ。熱ろしい被褥と体の熱さの

痛みがそれを思い起こさせる。だが、

この幸福な一瞬を迎えるためには、

3時間の苦しい準備が必要だ。トナカイ

をそりから外し、テントの設置地を

準備し、翌日の朝食の分まで足りるよう

に薪を用意し、テント用の棒を3本

出し、それぞれトナカイの首にぶ

ら下げて懸けたるようにな。ほどの

巨大の「額」を御本ノコヤリで削

り



れるようになった。

### マイナス45度での撮影

私とヤエー・カア・ケレビのウラジス

ラフ・ボキコフスキーはさらにカメ

マンというハンディに耐えなければ

ならな。カメラを操作するのは

手だから、一日が終わるころには指が

しびれてしま。われわれの道案内

のトナカイ飼育者にとってマイ

ナス50度は、神楽の民、下ウマンと

てのブラス50度と同じで、それは

驚くに値しないが、その暖か

さで初めて凍傷にかか。たと

したのだから、われわれには何を

か言わんやである!

私が携行したのはニコンF2とASと

フィルムは35mmと135mmと

が、これらすべてを衣箱の中に入れ

る



「オイミヤコン」の設置の前で記念撮影

# 寒極をめぐって

## ヤクーチア—1000kmの旅

トナカイ  
アレクセイ・コーニン  
カメウ  
イーゴリ・ミハリョフ

シベリアのユニークな冒険者は昔から研究者をひきつけてきた。シベリアは世界全体にとって寒さと手つかずの自然、果てしない雪原と人間精神の強さのシンボルとなった。一九八九年二月半ば、イタリヤのジャーナリストで冒険家のヤツエウ・バルケビチ（46歳）を異とするクループが、シベリアで一風変わった試みを行った。

### イタリヤ人冒険家

バルケビチの名が知られるようになったのは、一九七三年に彼が単独で、教命サーで大西洋を横断して、オホスプツク編果吉の住居を襲撃してからだ。襲撃に成功すると、翌の冒険ははいよいよ燃え上がった。以来、バルケビチは人がほとんど住まない、実質的にまだ研究されていない地球上の諸地域へ打掛連続隊を組織し、その長を務めた。彼とその仲間は大踏歩の地を何千回も踏破した。あらゆる困難を体験した。湖、深度100m以上の湖での暴風、マウス、無数の昆虫の襲撃、危険な動物との不意の遭遇……

こんな危険を冒すのも、人間が生きられないような条件、自分と仲間が生き

命を守れないような状況は実際にはない、ということを出明かした。一九八〇年、バルケビチは横断からの砂漠の任人、砂漠を走らせた。トナカイ人との結びに勝った。相手のトナカイ人よりも長い距離を一日に歩いたのだ。歩いたのは一知ほどにすぎないが、この一歩一歩が死の苦しみにあたることを思えば、目的達成のためには全力を尽くすことが出来る。長く歩きたいの持ち主に対して、畏敬の念が湧いてくる。おこまをえらばないような悪条件の中で生き抜いてきた長年の経験がバルケビチに、人間は自分の可能性の50%しか知らない、とさせる。

シベリアを踏破したい、というのはバルケビチの長年の夢だった。そして、そのチャンスが訪れた。ノース・ポッド通信社が、その容赦ない寒さゆえに、シベリアの中のシベリアと呼ばれるヤクーチアの遠征隊を組織したのである。

### 四重の冒険

初の冒険・イタリヤ遠征隊の日程は翌日間でヤクーチア（ヤクーチ自治州）



人間には寒くても、トナカイにとっては暑い。

サルも木から落ちる。バルケビチも降りから落ちる。



一行は悪化

水い



種がい食事の用意は、  
氷の切り出しから。  
ここで使った、やま  
りタバコは、



無人の雪原を行く遠征隊。野営地の周辺には  
トナカイが食べ残した植物の茎だけが――

トナカイが引く18頭のそりが世危した。行く手に待ち受ける困難を想像できたのは、8人の隊員の中でプロのトナカイ飼養者2人とセクター・ア・ナレロのカメラマン、ウラジスラフ・ボチコフスキーだけだった。ボチコフスキーはカメラをかついでタイガの中を何回も移動したことがあるからだ。残りの全員――ヤツェター・バルケビチとそのいつものパートナーであるイタリヤ人のロベルト・ロレンツァニ、ダヴァイフ・ピッチムニエ、ニコロ・キムルポルト、ノース・通信社カメラマンのイゴリ・ハリョフは、これまでの経験を頼りに、成功を期待するしかなかった。

4週間の行程のうち、寒い、と呼べる日は数日にすぎなかった。それでも、本隊はマイナス30度以下にならなかつた。という程度で、その他の日はすべてマイナス15度から10度というものだった。イゴリ・ハリョフはこり回想する――「数日後にすでに全員がひどい寒さに悩まされていた。毛皮の衣服は当座しか役に立たなかつた。雪が力一杯反しを押ししめ、そこから、重い出し、で、振りついた血を服めるために数百回走らなければならなかつた。そうしなければ、よくこまは、もうい、こらして

祖国の首都」からイミタコフまで、冬のタイガを1000km以上踏破するといふものだった。オイ・ヤンは一九三三年2月に気象マイナス57.7度Cを記録して、北半球の最極と公式に認められている。それまでの記録は同じヤターチアの隣町ベルホヤンスクのマイナス57.8度C(一八八五年)だったが、西地域での近年の観測によつて、オイ・ヤンの方がベルホヤンスクよりも平均して3、4度寒度が低いことが分かった。だからベルホヤンスクでマイナス57.8度Cが記録された一八八五年には、オイ・ヤンではほぼマイナス72度Cに達していたと考えられる。

というわけで、目的は決まった。手段は？ 隊員たちは現地人と同じ移動手段を使うことになった。トナカイぞりである。経緯の300kmは、体を頑化させるために尿管なしの車で行く。そこから先はマクレーチアの原住民――セクター人、エベン人、エベント人の長年におたる生き残りの経験と伝統的な装備を使うことが必要条件だった。

トナカイ飼養者が装備を提供した。幾世紀末頃の変わっていない衣服。幅1mならず、長さ2m半ほどの軽いソリ、伝統的な食べ物――凍った魚とトナカイ肉――。隊には2人のプロのトナカイ飼養者が加わった。トナカイぞりの御者・道案内で、初めのうち装備の使い方とそりの御し方を教えることになっていった。何しろトナカイぞりで無人のタイガをし〇〇km以上走破しなければならぬのだ。

2月17日、隊の準備は整い、40頭の